

個人生活史に見る草の根からの村おこし

—徳島県名西郡神山町の調査研究—

The Grass-Root Challenge for the Country Development from the Perspective of the Personal Life-History

— Investigation of Kamiyama town, Myōzai county, Tokushima prefecture —

渡辺 牧*

Osamu Watanabe

はじめに

社会学を含めて社会科学とは、「実証」が生命だった。作業仮説を、経験的な観察、調査データにより客観的に検証するのが「実証」である。だが、科学の専門分化の進行、逆に学際的・統一的視点の重要性からみて、仮説および検証の方法のあり方は、決して自明ではないのではないか。その意味で、個人生活史研究とは、現地での聞き取りを重ねるなかで、聞き取りに協力してくださる方々との応答から、「社会」の問題点や可能性が少しずつ見えてくるという特徴があると思う。

当初の仮説も、聞き取りする度に、変更をよぎなくされる場合が多い。本研究でも、過疎の山村＝閉ざされた村というイメージは、覆された。今は、山村の人々も、車で、自由に徳島市と往来している。想像以上に、社会が流動的になっている。

個人生活史研究は、実社会の《生きた現実》をもっとも生き生きと、濃密にとらえ、分析できる1手法ではないか。

科学とは、「開かれた営み」が理念であるものの、制度などの壁により研究者集団の内部に閉ざされた面も少なくない。個人生活史研究は、近年、注目されている「自分史」の記録・出版、

地域新聞社の伝統職人のヒューマン・ドキュメントなどをはじめ、専門研究者に決して限定されない、ゆるやかで開かれた領域だと思う。

筆者は、第1に研究者と調査研究の対象者との《共同作品》にほかならない生活史を記録することに重点を置き、第2に、その分析を図りたい。

I 調査研究の目的と方法

調査研究のフィールドは、継続調査中の、徳島県名西郡神山町である。徳島市に隣接しているものの、1955年の町村合併から人口がほぼ半減した過疎の町である。(渡辺【1989:5-24】)。

この町に生まれ育った I.Y が、昭和40年代前半に、多くの同世代の友人が町から出ていったなか、故郷に踏みとどまり、やがて、キャンプ場開設を志して、道路作り、整地、山小屋建設に、たった一人で取り組んでいった志向性、人生の脈絡、分岐点とは何であったのか。この課題を解明したいというのが、本研究の目的である。

高度経済成長と、過疎・過密の矛盾が進んだ時代に、あえて、過疎の村に20歳そこそこで戻ってきたのは、なぜだったのか。過疎の村から「広い世界」への離脱をめざしていった同世代

* 一般教育

の若者と、I.Y の「故郷の根源に立ちかえろう」との生き方とのちがいを、析出してみたい。現地での聞き取り、資料収集は、1991年7-8月に行った。ただし、I.Y と彼の妻はじめ、町役場、商工会の人々とは、1988年から、毎年のように、お会いしてきた。88年にも彼からは聞き取りしており、そのデータとの複合が、以下の記録である。

I.Y から、彼の帰郷以後の野球の活動、キャンプ場の歩み、スーパー林道建設、剣山の自然保護問題についての、新聞記事スクラップ（そこには、彼のその時点での備忘録、簡単な日誌的な書き込みもところどころあった）、掲載記事の載った雑誌などをお借りできたため、事実関係の把握、生活史の年表作成に参照できた。

聞き取りは、昼間に数度、岳人の森キャンプ場を訪ねて、来客への応接がないときをお願いして行った。1回平均2-3時間だが、途中、来客があるため、途切れたりもした。前回に聞いて、わからなかった点、詳しく聞きたい点を、また聞くという積み上げ方式で進めた。一夜、自宅を訪ねて、キャンプ場を紹介したテレビ番組と、隣人が撮影したキャンプ番組のビデオを、見せていただきながら、聞いた。

筆者は、個人的発想として、血の通った社会、人間分析への関心のなかで、個人生活史の聞き

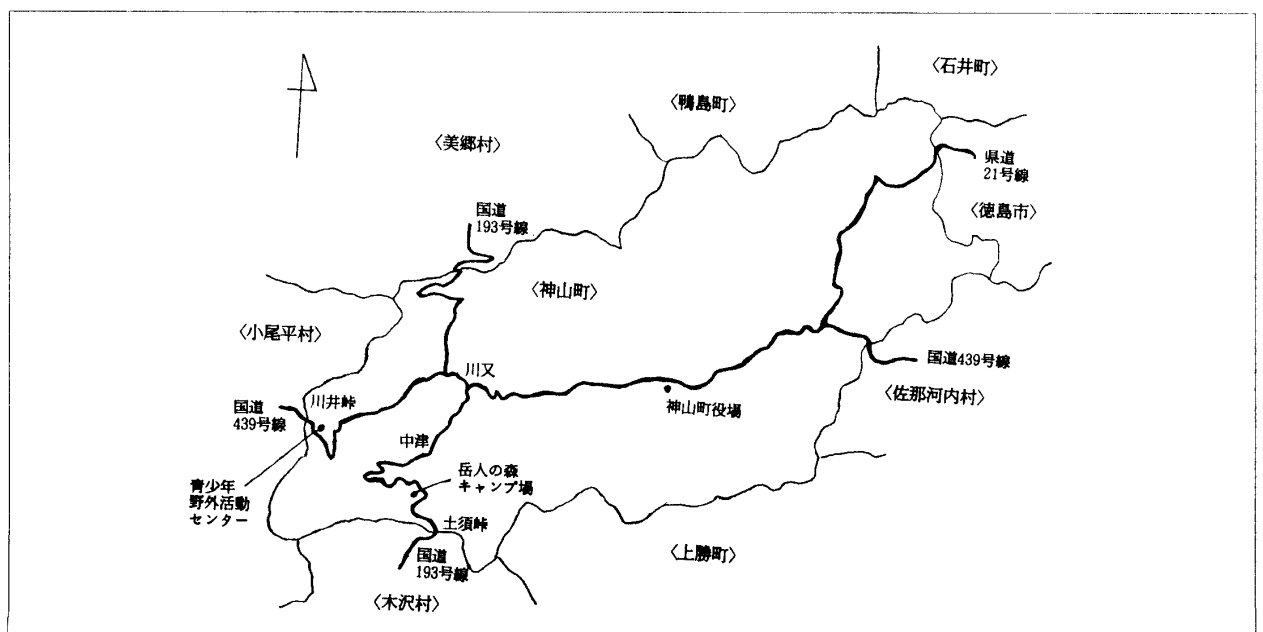
取りによる調査研究を続けてきた。現在の社会的属性をいったん、カッコに入れて、生活史の時空間のなかで、属性には収まりきらぬ内的志向性に関心があった。

個人生活史の解釈枠組として、翻身 (Alternation) = 「個人の内的変容に根差す生き方の変更」に関心を抱き、解釈枠組では、個人の志向性、《重要な他者》、準拋関係性に関する「同一化」、「規範的」、「比較」の3枠組を提示したR.L.Schmitt の立論、J.Urry の理論などに検討を加えてきた (【1982】 【1984】 【1988】)。これらを踏まえつつ、本稿では、ミクロな社会的次元としての個人生活史と、その生活の時空間としての地域のかかわりについて考えてみたい。

戦後の過疎過密などの急激な地域変動は、生活史における情況予測にまで大きな影響を及ぼしたのではないだろうか。そして、R. J. Lifton の言う「心理=歴史的根こそぎ現象」を広範に生み出しはしなかったか。だが同時に、根こそぎへの抵抗、地域再生と自らの生き方を一体化させようとする人々が出現してきた。

地域問題は、実践的には、ヒトの結集・ネットワークにかかっているとすれば、本研究は、生活史研究の応用をめざす試みでもある。

図1 神山町、岳人の森キャンプ場の略図



II 生活の根源としての地域

ここでは、その地域に生き、骨を埋めるという地域＝生活世界への一体化という意味で、《生活の根源》という言葉を用いたい。ただし、社会変化のなか、Lifton の言う「生きる力を損ねる心理＝歴史的根こそぎ現象」が広がっているのではないか。

根こそぎへの危機感が、《生きることの志向性》を収斂させ、地域再生への一契機につながる具体的事例を報告したい。

経済面では、その地域を離れては生業（なりわい）が成り立たない人々、親族の扶養、絆のため離れられない人々がいる。

郷土への愛着、「親の面倒は長子が」の規範、あるいは親兄弟への同一化、他地域への移動の契機がないなどから、生業が低迷しても郷土に留まる人々、都会からUターンしてくる人々、地域おこしの担い手として期待される人々の生活史も多様ではないか。

だが、産業構造の変化は、生業に様々な影響を及ぼしてきたし、一般的には生業が衰退し、職業移動が阻害されれば郷土を離れざるをえない。にもかかわらず、故郷の自然を生かした観光開発、歴史の掘り起こし、草の根報道などに挑む人々がいる。

過疎地などの人口流出は、教育や経済面のチャンスを探求するという積極的理由だけではなく、生業が困難になってきたという強い背景が見られる。

マクロ面では、近年、地方の核都市、とくに県庁所在地への人口集中が進み、県庁所在地から遠い市町村の活性化策が課題になっている。

教育、経済の社会移動に関する功利的なチャンス志向と、生活の根源としての地域に生きることとの狭間で、人々の人生はいかに営まれているのだろうか。

III 地域変容と生活史

都市と農村の地域変容が生活史に及ぼす影響と、逆に、個人の生活史における地域への状況対応、状況予測を検証してみたい。わたしたちの生活は、地域変動などの外的要因から、いかに振り回されてきたか。

多くの日本人にとって、これほどの東京集中は想像を絶したことだったと思う。就業・所得、教育・文化、情報面での地域格差は、社会的不公平への不満を生み出し、青年の地方流出が進んでいる。

知的認識＝批判的視座が、生活次元では無力なことを痛感させられたのが、80年代後半からの地価高騰・住宅問題ではなかったか。

戦後の例えば団塊の世代も、「たまたま早期に借金をして住宅を入手した者は得をした」といったインフレ、地価高騰を追認する現実主義の風潮に、「これほどの住宅価格の高騰は異常だ」という思いを打ち砕かれたことも少なくなかったろう。

「東京集中」＝過疎過密の矛盾が顕在化する中、「向都離村」した人々、とくに高齢に向かいつつある人々には引き裂かれた意識が見られるのではないか。

望郷の思いが強くとも、生活の基盤は都会にあり、だが、都会にあって心安らぐ生活には程遠いといった事例。そこには、かつて育った故郷と、今、暮らす地域とのギャップが介在しているよう。

一方、故郷に留まった人々も、就業条件の悪化、子供が都会へ流出するなどの問題、地域の高齢化、自然環境の破壊の波にさらされている。過疎地では、集落が存立できなくなり、共同移転の事例もみられる。

大都市が過密の一途をたどるなかでの、過疎地の地域解体は、社会的バランスを欠落した日本社会の現状を示しているよう。

IV I.Y の個人生活史

以上は、おおまかな研究の視点と枠組にふれたものである。

1988年からの同町での継続した調査研究のなかで、重要なインフォーマント、I.Y.に出会うことができた。次に、時代区分をして、彼の生活史をみたい。

IV-1 少年時代

I.Y.は、昭和24年6月、神山町上分字中津に農家の長男として生まれた。

神山町は、徳島市の西南に隣接し、鮎食川の上流部に位置している。人口は、昭和30年の合併当時には20197人もいたが、平成3年7月1日現在で、10196人（男4978人、女5218人）、世帯数は2997戸である。主な産業は、農業と林業であるが、林業不振もあって過疎問題に直面している。

I.Y.が上分中学のころ、同期生は約100人いた。しかし、今、I.Y.の中学生の息子の同級生はわずか5人だ。「過疎は急激に進んだが、心まで過疎にしたくない」という彼の生活史を見たい。

「行政が動くのをじっと待ってられない。ふるさとづくりは、自分ができることから」と、昭和40年代後半、20歳代前半で村おこしに徒手空拳、立ち上がったのが、I.Y.であった。

I.Y.の幼年時代は、かつての山村の素朴な暮らしを彷彿とさせるものだった。

上分小学校まで約3キロの山道を徒歩で片道30分かけて通学し、日が暮れるまで野山や鮎食川の清流で遊んだ。暮らしの場全体が、自然そのものであり、自然のなかで思う存分遊べたことを、こころの支え、誇りとして、生きてきた人々が神山町には多い。

年に一度の神社での祭礼は、村人みんなの楽しみだった。

昭和30年代には、假地教育に志しを抱く小学

校教員の新たな教育への取り組み、民主化の時代潮流のなかで、嫁姑の関係に苦しんできた町内の婦人たちが組織化して、女性たちの横の交流が始まった。イエの壁を直ちに突破できたわけではなかったが、地区を越えた女性たち相互の出会い・交流の端緒である。

農繁期には、村の子供は、耕作用の牛馬の後押しを急な斜面で手伝ったりした。小学生が、自家飼育の鶏卵を、川又という上分地区唯一の商店があったところの店まで、通学の途中に売りに行ったりもした。

米、麦、野菜から味噌、醤油、豆腐まで、食料の大半は自給自足で、子供のおやつは、豊富に自生している山いちご、栗、柿などが多く、敗戦後の混乱期にもかかわらず食生活に窮乏はなかった。

ただし、上分地区の耕地は、水量こそ豊かだが、大半が傾斜地を平坦に改造した土地であり、平野部に比べれば、格段に厳しい労働が必要だった。

食生活でも、鶏卵は貴重な現金収入源に回されがちであったり、肉、魚、牛乳など動物性タンパク質が不足気味だったと言われる。

海の魚は、徳島市から行商人が運んできたり、川又地区の商店に並ぶサバなどの干し魚が大半だった。

IV-2 高校卒業後の模索期

農林業の生業のほかに、青年団、地域でのスポーツ活動に励み、自然を生かしたレクリエーションへの視点を培っていった時期である。

I.Y.は、徳島農業高校を卒業、43年4月、徳島県林業試験場（現在林業総合技術センター）に研修生として学ぶ。

44年、20歳のとき神山町の実家に帰り、農林業に従事。持ち山のうち、杉、ヒノキを植林した約30ヘクタールの管理を父からまかされ、林業経営者になるための勉強を始めた。だが、「回りを見ても山ばかり」の生活は物足りなかった。

青年団活動に参加したり、神山体育協会の軟式野球チームに入って、49年7月には四国大会に出場したりしたが、「趣味、遊びは人生の目標ではない」と空しさを痛感した。

44年、「野球を教えてほしい」と要請され、神山町上分スポーツ少年団の指導員になり、レクリエーションの指導をした。町に残る若者を一人でも多く育てたかったからだ。

スポーツ少年団の全国規模の指導者研修会・講習会で、北海道などに何度も行った。

張り切って活動したものの、手応えはなかった。若者たちの就職先は町役場、農協、森林組合程度で、若者は次々と町の外へ出ていった。

46年4月、徳島県が神山町の川井峠に青少年野外活動センターを作ったため、2年余り、夏の間、臨時指導員として、訪れた中、高校生らの世話をした。このころから、I.Y は、神通滝、雲早山に連なる森林地帯の山岳美を生かして、人を呼び込むことを考え始めた。

IV-3 シャクナゲの里キャンプ場への挑戦

徒手空拳さながら、キャンプ場開設に、たった一人で挑戦し始めるが、周囲からは理解をなかなか得られなかった時期である。

47年、神山町上分字中津でキャンプ場開設を志して、父に相談する。父は、土須峠近くに地元の人たち7人と山林70ヘクタールを共同所有していた。そのうち、昔、木炭、薪に活用されていた雑木林約10ヘクタールが労働者不足から放置されているのを目をつけた。

「価値のない安い山だと言われているこの山に、キャンプ場を作り、都会の人が来れば、町の特産品も売れる。若者の働き口もできるではないか」と活用を考え、共同所有者を一人ひとり説いて回った。ようやく、父らの了解を得た。

キャンプ場開設について、I.Y は「何かをやってみたい1ステップだった。奥地の自然保護、衰退する奥地のために何かをやりたかった」。

父の持ち分のうち3ヘクタールを造成、キャ

ンプ場開設に挑戦し始めた。ひとりで山の頂上近くの水源から水を引いた。下草を刈って道路を付けたり、斜面を平坦にしていた。

高山植物のシャクナゲの植栽を開始した。もともと土須峠にはシャクナゲが自生していたが、苗木が持ち去られ僅かしか残っていなかった。I.Y は、町内や美馬郡木屋平村から、シャクナゲの苗を買い入れては育ててきた。

自然を生かすため、イヌツゲ、サルスベリ、アセビなど樹木は残した。

しかし、数年間は、道が未舗装と悪いために人が訪れることは稀だった。「そのうち失敗するぞ」と周囲からは笑いものにされた。

48年、木屋平村の S.W と結婚。結婚前から、キャンプ場開設についての話を S.W にしていた。人生で何かをやりたい1ステップとしてキャンプ場を構想した。

目的は「奥地の自然保護、衰退する奥地のために何かをやりたい」だった。キャンプ場づくりで家計を圧迫しないようにしつつ、農林業で蓄えた資金や、少しずつの借入金で、「40歳までにシャクナゲ園開園を」と考えていた。シャクナゲは「霧の花」「雨の花」とも言われ、適地不適地の差が激しく、育てるのは至難だ。1千本植えたうち、7割に虫がついたこともあった。虫の穴に一つずつ注射して退治した。

51年末からキャンプ場オープンのため、施設建設に着手。

IV-4 キャンプ場オープン

キャンプ場をオープンしたが、道路などの客観条件が悪く、自立を模索した時期である。

52年6月、岳人の森キャンプ場オープン。広場、100人収容できる雨天集会場、800メートル離れた水源からの水道設備、50人分のテントも完備した。夜間の明かりはランプだった。しかし、道路が未舗装のため、年間500人が利用するだけで、採算はとて取れなかった。

当初、キャンプ場のPRのため、徳島新聞社本社を頻りに訪ね、記者に相談、協力してもらっ

た。地方版の取材では石井支局から、その他の面の取材には本社から記者が来た。

52年4月の徳島新聞に「ヤマの後継ぎ青年 観光林業へ意欲 遊休林にキャンプ場」の3段見出しで、キャンプ場の前触れ記事が載り、I.Yの「採算を考えず、青少年が自然を楽しみ、休養してもらおう施設にしたい。将来は規模も大きくし、シイタケなどを植え、春から秋にかけ都市部に住む人たちが利用できるものにしたい」との抱負が掲載された。

52年8月、PRも兼ねて「かぶと虫捕りキャンプ」開催。I.Yが、キャンプ場近くに見つけたかぶと虫のたまり場に子供たちを案内してくれ、夜は、キャンプファイアーを楽しむ手作りの企画だった。

I.Yの記録ノートによると、「岳人の森での初めての主催事業。平日にもかかわらず、予約がいっぱいあった。徳島新聞社の日曜ヤング欄担当のT氏に頼み、計画したこの集いは大きな勉強になった。8月7日付けの新聞に載り、『朝、新聞を見た』と言って、早速、その日に家族連れで徳島市から訪れた人もあった。日曜には、朝から電話が頻繁に鳴り、予約や問い合わせがたくさんあった。かぶと虫というのは、子供たちにとって何か宝物を得るような気持のようだ。子供が求めれば、世の親は誰しも、それをかなえてやりたいと願う。キャンプ場のような観光業は、まず、子供を呼び込むことが大切だということがよくわかった。今年は、新聞社の方々のお世話で、5回ほど掲載してもらったが、とにかく新聞とは極めて効果の大きいものだ。このかぶと虫大会も、7月中旬ころに新聞に載せたら、今年の利用者はもっと多かったろう。来年は7月下旬の夏休みに計画してみたい」。

53年7月、月末に「親子キャンプ大会」を計画するが、台風接近のため参加者は1家族2名のみ。記録ノートによると「昨年好評のかぶと虫大会に自信を持ち、今年はこの催しを計画した。しかし、さっぱり期待はずれ。最初から申し込みが少なく、5グループ25名くらいだった

が、キャンセル続出となった。全く残念。しかし、このようにしばしば新聞に載ることで、次第に名は知れてゆくので、そういった方面には効果はあると思う」。

50年代半ば キャンプ場に自家発電設備を導入。それまでは夜間はランプを使用。

59年、キャンプ場に管理小屋、食堂、売店開設。妻もキャンプ場に、春から秋のシーズンは詰め始める。

61年1月、神山町の成人式での村おこし討議に、助言者として参加した。I.Yは、「道路整備を急ぎ町内を循環するルートを整備してこそ、町全体の均衡ある発展が図れる。観光面では、町内には多くの景勝地があり、徳島市内から近い有利さはあるが、重点地域を決め、集中的にてこ入れしてはどうか。町の自然景観こそ、神山の《一村一品》だ。原生林を守り、町の活性化に利用すべきで、人の流入があってこそ最も効果がある」と意見発表した。町長も、「町を離れた人たちが一人でも多く帰ってくれる神山にしたい」と述べた。

62年、キャンプ場に、夏花の王者といわれるナツツバキの植樹を始める。

IV-5 シャクナゲ祭

この時期は、待望のシャクナゲが成長して、この花をキャンプ場のシンボルとしてシャクナゲ祭に全力を挙げ、町内からも高い評価を受け始めた。施設の充実も進み、キャンプ場の将来展望が開かれつつある。

62年4月末から5月の黄金週間にかけ、町民の協力のもと、シャクナゲ祭を7日間にわたり初めて開催した。シャクナゲは約1千本。町内の植木愛好家の協力でシャクナゲ、サギソウ、エビネランなどの苗木の即売、草もちつき大会も開催。県外から多くの入場客が訪れ大成功。

63年、シャクナゲの花がつかず、この年は祭は休む。

平成元年5月、第2回シャクナゲ祭。特産品売り場、地元郵便局によるユズ酢などのふるさ

と小包の受付、町職員が杉の廃材を利用して作ったハガキ、お盆なども販売。しかし雨ばかりの天候、瀬戸大橋博の影響、開花も大幅遅れのため、人出はさっぱり。

2年4月、徳島天文研究会の指導・説明のもとで、岳人の森キャンプ場でオースチン彗星の観望会が開かれたが、天候が悪く観望できなかった。I.Yの記録には「非常に好評で、予約電話が相次いだ、30名で打ち切った。寒い時期なので、山小屋にストーブをたくさん入れた。夏場なら、テント持参で何人でも可能だったが、当日夜は、月と木星を観望したが、降り出した雨のため、オースチン彗星は見れなかった。山小屋の設備が整っていれば、こういったイベント的なものは人気があるようだ」。

2年5月、キャンプ場に大型ダンプカーで1600台分の土砂を上分から搬入、100台収容可能な駐車場兼オートキャンプ場（2千平米）ができる。第3回シャクナゲ祭。NHK、四国放送、ラジオ局、タウン誌でも報じられ、人出はまずまずだった。しかし、1年目には遠く及ばない。

2年10月、神山町商工会がオフロード・ライダーの第一人者、寺崎勉氏を招き、「ライダーと町の活性化」のテーマで座談会開催。寺崎氏は座談会の翌日、岳人の森を訪ね、I.Yと語り合う。

2年11月、キャンプ場管理小屋2階に20畳の和室ができる。

3年5月、第4回シャクナゲ祭。30アールの園に1千5百本のシャクナゲが成長した。ゴールデン・ウィーク中、4千人が訪れた。

3年6月、神山町、勝浦郡上勝町、那加郡木沢村の村おこしグループがつくる「山ぼうしの会」（平成元年6月発足）が木沢村で開かれた。神山町からは、I.Yが代表の「山一五（やまいちご）の会」、上勝町からは「プラス2001」（岩坂恵子代表）、木沢村からは「村おこし30人衆」（谷内清孝座長）ら36人が参加。I.Yは「イベントの最中は人が集まるが、あとには何も残らない。10年単位ぐらいの長い視野で考え

る必要がある」と語った。3年7月、キャンプ場のナツツバキが500本に増え、開花した。

V I.Yの志向性

I.Yの志向性について—これは今後の研究の作業仮説でもある—ふれたい。

彼が、今すぐにの経済的利益ではなく、長期的視点に立って、村おこしと岳人の森を考えようとしているのはなぜか。

その第1は、シャクナゲの里に象徴される自然との関わりの深さではないか。シャクナゲを育て始めてから、シャクナゲ祭開催までに10数年の歳月を要したように、山村の自然を生かす村おこしは短兵急ではできないと思う。

第2は、今後の分析課題だが、彼の仕事の理解者、支援者という《重要な他者》たちの存在であろう。

第3は、過疎の度合いが深刻な地域であるが故の、大局的・長期的視点の芽生えではないか。

I.Yは「過疎の山村は、人の往来があるだけで、活性化につながってゆく。ふつうは経済性のみ求めがちだが、それ以前にまず、人の往来が大切だ。往来があれば、山村にも活気が出てくるし、若者にも意欲がわき、産業の活性化が始まる。人が来ると、ゴミが捨てられ、収益にもつながらない—との批判は、ヤッカミ、軽薄な目先だけの意見ではないか。要は、自分一人になったら、ここには住めない」と語っている。

こうした彼の志向性の背後には「町の中心の神領地区などには、地域活性化に取り組む人が多いが、自分の暮らす上分地区には少ない」という危機感がある。

第4は、彼固有の人生観・価値観である。20歳代に、村おこしに関わりだしたきっかけ、終わりなき夢について、彼は次のように言う。

「人間の人生とは70年かそこら。目一杯、活動できる時間は、20歳から60歳くらい。もっと言えば、そのうち半分は夜。そう考えると、ゴルフや釣りなどの時間ももったいない。二度と生まれてこないのに、

前のめりに夢を持って、次世代に残る夢を伝えられたら、どんな素晴らしいことか」。

VI 結び

以上、I.Y. の個人生活史をたどりつつ、考察を図ってきた。岳人の森は年間を通じて、まだ安定収入には遠いため、一家の生活の経済基盤は、植木を育てて出荷することにおかれている。だが、現実の生業（なりわい）は生業として、他方で、理想郷をめざそうとして生きてきた彼の複眼的な生き方は、村おこしに対して重要な示唆を与えていると思う。

本稿では、生活史のモノグラフ記述が中心となり、その解釈については今後を期したい。最後に、今後の研究課題にふれたい。

その第1は、昭和60年に全面開通した剣山スーパー林道の自然保護運動と、I.Y. の生き方との関わりである。

第2は、彼の仕事を支えている町内、および地域外とのネットワークの分析である。

第3は、彼のパートナーたる妻、そして子供たちの岳人の森に対する意識と協力ぶりについての分析である。

記

本研究では、現地調査で、多忙ななか、聞き取り、資料収集にご協力いただいた I.Y. 一家の方々、神山町の町役場、商工会、美郷村の方々らに、深く感謝したい。

文献

- 青井和夫他編 1980 『家族と地域の社会学』 東大出版会
青井和夫他編著 1963 『コミュニティ・アプローチの理論と技法』 續文社
安達生達 1973 『むらと人間の崩壊』 三一書房
—— 1979 『むらの再生』 日本経済評論社
—— 1985 『伝統農民の思想と行動』 日本経済評論社
有賀喜左衛門 1929 「民俗学の本願」 『有賀喜左

- 衛門著作集』 VIII巻 未来社
—— 1949 「村落史と日本史」 『著作集』 VII巻 未来社
—— 1958 「村落の概念」 『著作集』 X巻 未来社
—— 1960 「家族と家」 『著作集』 IX巻 未来社
有末賢 1984 「生活史研究とライフ・ヒストリー」 川添登編 『生活学へのアプローチ』 ドメス出版
江原慎四郎他編著 1975 『地域社会とレクリエーション』 ベースボールマガジン社
福田アジオ 1982 『日本村落の民俗的構造』 弘文堂
福武直 1949 『日本農村の社会的性格』 東大出版会
—— 1954 『日本農村社会の構造分析』 東大出版会
—— 1959 『日本村落の社会構造』 東大出版会
—— 1971 『日本の農村』 東大出版会
神領村誌編集委員会 1960 『神領村誌』
運見音彦 1970 『現代農村の社会理論』 時潮社
上分上山村誌編集委員会 1979 『上分上山村誌』
神谷慶治編 1967 『日本の山村問題』 東大出版会
神山町役場 1991 『広報かみやま』 148号などの各号
神山町教育委員会 1991 『神山の教育』
神山町商工会 1987 『ふたむかし—神山町商工会創立20周年記念誌』
川本彰 1972 『日本の農村の論理』 龍溪書舎
きだみのる 1967 『にっぽん部落』 岩波書店
北川隆吉編 1980-1981 『日本の経営・地域・労働者』 (上)・(下) 大月書店
近藤康雄 1985 『農村調査の構造と実際』 農山漁村文化協会
松本通晴編 1983 『地域生活の社会学』 世界思想社
宮本常一 1953 『日本の村』 未来社
溝上泰子 1966 『変貌する底辺』 未来社
水野節夫 1986 「生活史研究とその多様な展開」

- 青井和夫監修『社会学の歴史的展開』サイエンス社
- 杜性次他編 1981 『移り行く山村—上分上山の山河』 上分農業共同組合
- 村田勉雄 1978 『ムラは滅ぶ』 日本経済評論社
- 村田勉雄・乗本吉郎 1978 『イナカ再建運動』 日本経済評論社
- 中野卓編著 1977 『口述の生活史』 御茶の水書房
- 中田実他編 1986 『リーディングス 日本の社会学6 農村』 東大出版会
- 並木正吉 1960 『農村は変わる』 岩波書店
- 西川大三郎他編 1972 『日本列島—農山漁村—その現実』 勁草書房
- 西尾勝 1975 『権力と参加』 東大出版会
- 村落社会研究会編 1958 『戦後農村の変貌』 時潮社
- 鈴木栄太郎 1940 『日本農村社会学原理』 河出書房
- 玉野井芳郎他編 1978 『地域主義』 学陽書房
- 寺崎勉 1991 「神の山の村おこし 神おこし」 『アウトライダー』57号 ミリオン出版
- 徳島県 1988 『徳島県長期観光振興計画』
- 1991 『剣山周辺観光レクリエーション地域整備基本計画策定調査報告書』
- 渡辺牧 1982 「志向性の社会学序説」 『ソシオロゴス』6号
- 1984 「翻身論序説」 『ソシオロゴス』8号
- 1988 「『他者とのコミュニケーション』への分析視角」 『共栄学園短期大学紀要』4号
- 1989 「地域おこしと地域情報—徳島県名西郡神山町の調査研究—」 『共栄学園短期大学紀要』5号
- 山川菊栄 1983 『わが住む村』 岩波書店
- 山村順次編 1986 『図説 日本地理』 大明堂
- 柳田国男 1929 『都市と農村』 朝日新聞社
- 米山俊直 1969 『過疎社会』 日本放送出版協会
- 若林敬子 1979 「過疎山村の解体過程」 『人口問題研究』150号 厚生省人口問題研究所